

去勢地下闘技場3

本日は調停試合！

男女の揉め事を金責め格闘で解決！

柔道三段ストーカー官僚を

ただの巨乳キャバ嬢が

キ〇タマ狙って打ち倒す！



玉子王子 著

1章 巨乳キャバ嬢の度胸付けはキ〇タマ踏み潰し

理不尽、と白鳥は思っていた。

引き締まった体で、胸だけ巨大という最近の若い日本人女性らしい無茶な体型。

キャバ嬢である。

テレビの影響で無茶なカロリー制限をして手に入れた体。

当然、戦うのにはまったく向いていない。

背が低く、胸が大きいモデルといえれば彼女の体型に近いだろう。

ぺたぺた、と裸足の足の裏がフローリングの床を踏みしめる。

空は見えない。

地下闘技場のリングの上だ。

民家の部屋のようだが、試合場なのだ。

ずっと昔、戦争があったという。

そのときの本土決戦とかのために作られた地下要塞の一つだと言う話だ。

ニュートリノとかいうなんだかわからないものを検出する施設の候補にもなったらしいが、ライバルに負けて民間に売られ、今は地下闘技場というわけだ。

と、白鳥にはそんな曖昧な認識しかなかった。

別に、そこで戦うのに必要な知識でもない。

今、地下闘技場にいくつもある会場の一つには、いくつかの家というか天井がない部屋が作られていた。

その中で、何らかの設定を持って格闘戦を行う、「設定戦」が行われていた。

不倫をしていた夫を、不倫相手や本妻が襲うというなんだかわからない設定で、一部屋に五人ずつの女が格闘家の一人の男を襲う。

女は皆、素人。大体がただの主婦か結婚前の若い女。三十前後といったところ。

ただ、この闘技場での試合経験があるものは多い。

白鳥には、それはない。

二〇少しのキャバ嬢。巨乳を原色のビキニの下に詰め込んでいる。

今日が初めての試合だ。

本番のための練習。

本番は、柔道使いの官僚との試合だ。

なぜ巨乳キャバ嬢がそんな相手と地下闘技場で戦わねばならないのか、白鳥本人でさえ半ば冗談のような気がする。

しかし本当に戦うのだ。

そのために、今練習に試合に出ている。度胸付け、ともいえる。

二つ目の部屋が、白鳥の配置された場所。

四つの部屋に五人ずつの女がいる。

合計すると二十対一だ。

いくらなんでも無茶な数字と思えるが、受けるのだから男の側は勝てるつもりなのだろう。

ちょっと、腹が立たないでもない白鳥。

——いくら男の人が力強いからって、二十人でも女になら勝てるなんて舐めてるわよね。しかもこの闘技場のルールだと……アリなんだもん。

自分のビキニの前をチラッと見る。

そこへの攻撃。



——いくら男の人が力強いからって、
二十人でも女になら勝てるなんて舐めてるわよね。
しかもこの闘技場のルールだと……アリなんだもん。
自分のビキニの前をチラッと見る。
そこへの攻撃。

いや、白鳥には付いていないが、
男ならそこについている部分への攻撃。
それがこの地下闘技場で許されている。
というか、むしろ奨励されている。

——タマタマ狙いアリ

なんて、信じられないよ。

いや、白鳥には付いていないが、男ならそこについている部分への攻撃。

それがこの地下闘技場で許されている。

というか、むしろ奨励されている。

——タマタマ狙いアリなんて、信じられないよ。

「白鳥！ そっちいったよ！」

いきなり。

前を向いてはいたが、しっかり見ていなかった白鳥。

頭を上げる。

目の前の男、絶叫。

「っだあああああああ！」

妙なアクセントの叫び。

叫びつつ、蹴り。その場で回転し、前ではなく後ろに向けて回転して踵を振ってくる。

男の踵が白鳥に減り込む。

「いぎゃあああああああ！」

胸、横から弾かれていた。何を考えているのか分からない。

胸を横から跳ね飛ばす蹴りなど、意味不明だ。

しかも、何か後ろ向きに回転していたように白鳥には見えた。

素人だが、廻し蹴りぐらい知っている。しかし後ろ向きに回転する技など、白鳥は考えたこともなかった。

困惑しつつも、そんな事は激痛で言っていられない。

「いたあああああああ！」

叫び、床の上を転げ回る。

それを見て、仲間の女たちが激昂する。

「あ、この野郎！ オッパイ蹴りやがったな！」

「女特有の部分狙うんだから、男特有の部分狙われても恨むまいな！？ キ〇タマ潰しだよ！」

この闘技場では男性器、男の最大急所、睾丸への攻撃が許されている。

というか、そこへの攻撃を受ける男を見るのが、観客の最大の楽しみという恐るべきドS女子の宴だった。

観客が選手の女たちに同調して叫ぶ。

「いいぞ！ キ〇タマ潰してやりな！」

「って、もう四回も去勢されてるけどね！」

ナノテクノロジーで、睾丸ぐらいは一瞬で治せる時代だ。

だからこそ急所攻撃アリのルール of 試合にホイホイ男が出てくる。

とはいえ、たかが女相手に、潰される気はないのだ。

ただ、万が一のとき助かるから、安心してでられるというだけ。

なのだが……男たちのそういう目論見通り試合が運ぶことはまずない。

試合場を囲む観客席は女性だけが数千人で、動画配信の視聴者もほぼ女性が大半を占める。

ドS女子のための狂宴なのだ、だから主催者側はインチキこそしないが、そもそも戦力比的に男が絶対勝てないカードしか組まない。

その上、睾丸が潰れば女には報奨金が出る——ちなみに、男にも見舞金が出るが、それは別に男の行動を変化させない、誰が金のために睾丸を潰されようとするだろうか。

元々体力で勝る男を倒すには急所攻撃がもっとも合理的だ、自分が女なら同じ反撃も食らわない。

その上金が出るとなれば、女たちはもうとにかく男の急所を狙い、睾丸を潰しにくる。

男たちは「万一のときの保険」と思っていたナノマシン入りの薬をラウンド毎に飲む羽目になる。

今白鳥の乳房を蹴り飛ばした男もそうだった。

前の部屋で四ラウンド戦い、四回とも五人の女たちに押さえ込まれて睾丸を握り潰され、踏み潰さ

れ、叩き潰され、捻り潰され、とにかく毎回去勢された。

それも女たちはただ潰すだけではない、ゲラゲラ笑い、「女に急所を潰される屈辱的な状況」を嘲笑しながら、である。

怪我は治るが、痛みや衝撃は消えないのがナノ薬の効果である。

その上、**去勢嘲笑**というトラウマモノの精神攻撃を四度も食らっている。

男はフラフラだった。

元々蹴り主体で、多彩な飛び技もあるアクロバットな格闘技の達人で、オリンピックの日本代表の合宿にも参加した一流選手だった。

それが、自分より背の低い女の顎を跳ね飛ばそうと後ろ廻し蹴りを放ったのに、足が上がらず胸の辺りを跳ね飛ばすだけだった。

男相手なら外れていただろう。

まだ少しは動けるが、それもあと僅かだろう。

もう1発、別の相手を蹴ろうと思うが、体が動かない。

蹴りのために足を大きく動かしたため股間が刺激され、激痛を生んでいた。

怪我はないはずだが、先ほど潰れた感覚だけ残っているために起こる、ある種の錯覚だが本人としては実際に痛いのだ。

「あああああああ！」

叫ぶ男。

股間を押さえてよろける。

「きゃははは！ 自分の蹴りでキ〇タマ痛いみたいよ！」

「アホだわこいつ！ キ〇タマ蹴り潰しましょう！」

周りから群がっていく女たち。

といっても、三人だ。

四人いるはずだが、一人は倒れた白鳥に駆け寄っていた。

「白鳥しっかり！」

同じキャバ嬢で、青垣という、すらりと高い背とかなりの巨乳を持つスタイルのいい女。

「青垣……」

大きな胸を押し潰すほど抱きしめて押さえ込む。

痛みで目がちかちかする。

気が遠くなる。

暴力に縁のない生活を運良く送ってきた白鳥だ。

というか、仮にDV男と暮らしていても、胸を横から殴り飛ばされることはまずないだろうが。

元々まじめなOLで、先輩に誘われてホストクラブにいった。

恋愛などしたことがなかったので一発で嵌り、のめり込んだ。

貯金もなかったので安易にキャバクラでバイトを始めたら、会社にばれてクビになってしまう。

そしてホストも他の客が逃げて、借金を背負わされて何処かに逃げてしまった。

白鳥に風俗に行け、などといってくることはなかった。

別に彼女が大事だったわけではなく、金を引っ張れるほど親しいと思っていなかっただけである。

が、彼女は人がいいので「自分は本命だったからあえて迷惑をかけようとしなかったのだ」といいほうに受け取ったのだった。

ホストのせいでOLを辞めたようなもので、この先どうなるかよく分からないのに本当に気のいい性格といえる。

「そらそらそら！」

「あああっ！」

倒れた男の足を掴み、両脇に抱え込む女。

背後に別の女が周り、羽交い絞めにする。

グニュー、と海パンのようなパンツに包まれた股間の肉塊を裸足で押す女。

「うふふ、こうなったら男はおしまいねえ。大事なタマタマ、踏み潰させてもらうわよ」



「や、やめて……」

「さあ、どうしようかしら？」

手空きの三人目がニヤリと笑うと、男の腰の横にしゃがむ。

そして、海パンに手をやる。

「あんた、小さいんだって？」

「ペ○スよ、ペ○ス！ 小さいってさっきの部屋で大賑わいだったもんね！」

「オッスオラ短小、っていいなさいよ！」

「い、いったら助けてくれるのか？」

「おらっ！」

「はぐあああああああ！」

ごちゃ、と女の足が男の股間に減り込む。睾丸が潰れ、悶絶する男。唇を噛み、目は意味もなく上を向く、顔がドス赤く染まる。

「ぐんむうううう」

「あははは、なんだ、片金も潰れてない感じね」

「ツルッと逃げたみたいね。運のいい……キ○タマ！」

「おぐあああああ！」

ゴチャゴチャゴチャ、と何度も踏み潰す。

グリグリグリ、と足の裏を拭くように海パンの股間を磨り潰す。

「あはは、なんだ、まだ余裕あるみたいね。で、いう？」

「お、オッスオラ短小！ 短小！」

「あははははは！ いったわこいつ！」

「男なんてキ○タマ人質に取られてたら、何でもするのねえ！」

「じゃあ、これはどう？」

「あああああああああ！」

海パンを下げる女。

プルン、と小振りすぎる局部肉が揺れる。

蹴りまくられながら不思議だが、手術用の男性器萎縮をとめる薬を試合前に飲んでいるので、玉も竿も緩々なのだった。

それはもちろん、玉を攻撃しやすいようにという運営側の配慮であり、パンツを脱がされたときに一物が縮んでいるのは男の誇りを傷つけるから、などではない。

その小振りな一物を掴む。

「うふふ、これなら立って×センチ？」

「一桁ねえ！ きゃはははは！」

「ひiiiiii！」

くにゅくにゅ、手コキをはじめめる女。

片手で竿を摘まみ、片手で玉を撫でて転がす。

「ほらほら、立ちなさいよ。どのぐらい短小チ○ポか見てあげるわ！」

「む、無理だ……こんな状況……はぐあっ！」

「キ○タマー」

ゴスゴス、拳を握って陰囊に叩きつける三人目。

「やめてええええええ！ 立たせるから！」

「ちょっと新人さん！ あなたたちも来なさいって！」

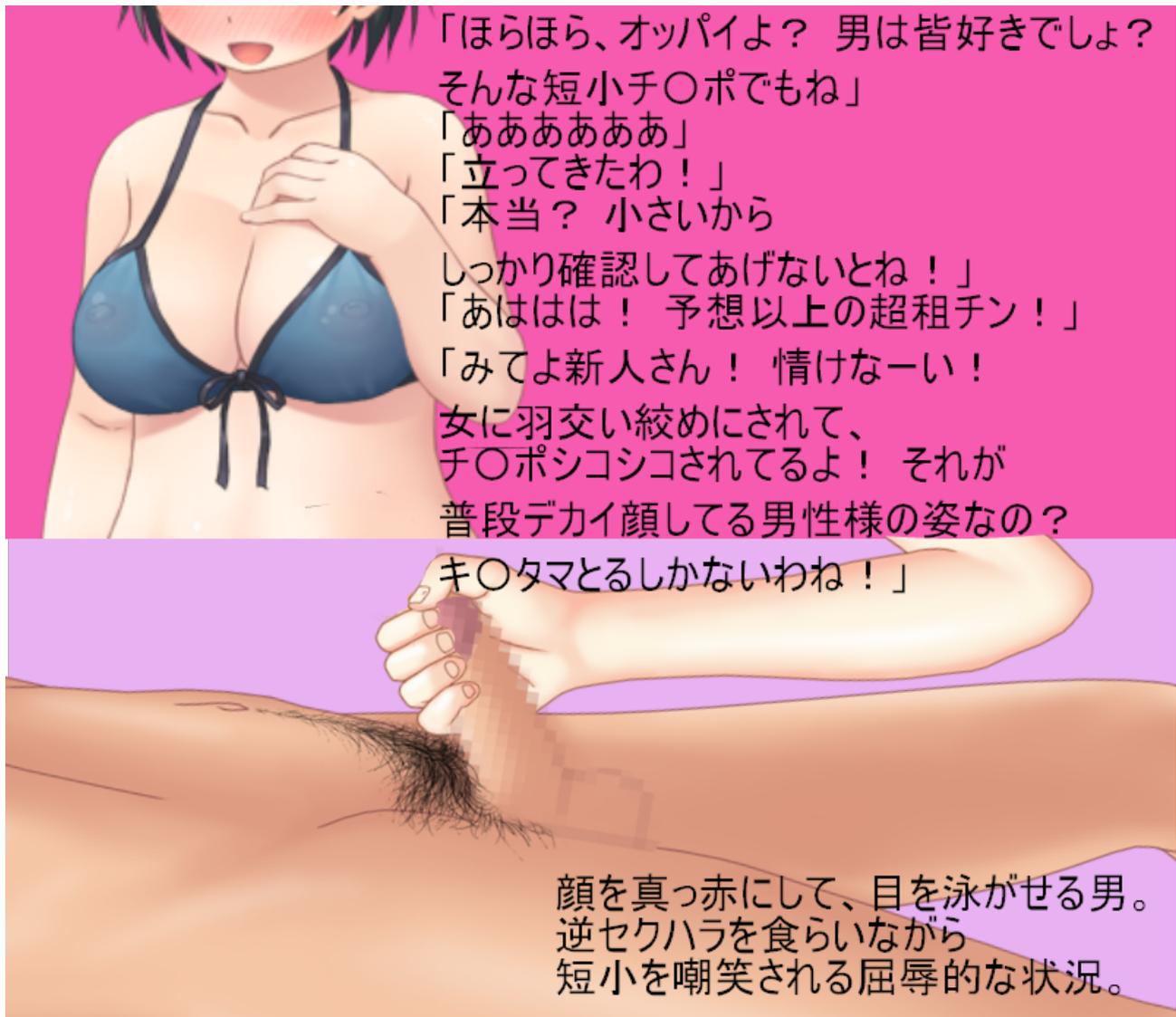
「ほら、みてご覧。男なんてタマタマ狙えばこの通りなんだから。一人なら絶対私たちより強くても、

キ○タマ狙って、数で押せばね」

電気あんまをしていた女が立ち上がる。

そして、男の顔に乳房を押し付ける。

「ほらほら、オッパイよ？ 男は皆好きでしょ？ そんな短小チ○ポでもね」



「ああああああ」

「立ってきたわ！」

「本当？ 小さいからしっかり確認してあげないとね！」

「あははは！ 予想以上の超租チン！」

「みてよ新人さん！ 情けな一い！ 女に羽交い絞めにされて、チ○ポシコシコされてるよ！ それが普段デカイ顔してる男性様の姿なの？ キ○タマとるしかないわね！」

顔を真っ赤にして、目を泳がせる男。

逆セクハラを食らいながら短小を嘲笑される屈辱的な状況。

それでも、金潰しよりはまだましだろうか。

「そらそらそら」

「ああああああっ！ や、やめろっ！」

皮を生かし、先端と首の辺りを上手く刺激する女。

大人の女らしく、手コキは文字通りお手の物か。

短小とはいえ一様問題なくセックスできる大人の男性器である、フル勃起すればどうにか握ってその手を僅かながら上下させてやることも出来る。

そうしつつ、玉もモミモミと刺激する。こちらは普通のサイズであった。

蹴りまくられても、毎ラウンド潰されて再生するので腫れていたりはしない。

手コキに玉揉み。

繊細で細く柔らかい女の手の程よい温かさに癒される男。

が、頭の奥では分かっていた。

このままエロ展開などありえないと。

——というか、もうこれはどう考えても、出したら玉を……

「じゃーん、大発表！ いったらキ〇タマっーぶす！」

「じゃーん、大発表！
いったらキ〇タマっーぶす！」

「あああああああああああ！ やっぱりかよおおおおおおおおお！」

クニクニクニクニ、巧みな手コキに、
モミモミモミ、と乳房でも揉み上げるような玉揉み上げ。

「ほらほらほらあ、オッパイよー、むにむに、柔らかいでしょ？」

舐めてもいいのよ？ 行くのが早まって、

男でいられる時間が短くなっちゃうけどね？」

「やだああああ！ 男でいたいよおおおおおおお！」

「きゃはははは！ タ〇キン潰れてもすぐ治るって！」

「それでも嫌なんだあああああああああ！」

「キ〇タマ潰すキ〇タマ潰すキ〇タマ潰す」

羽交い絞めの女が、耳元で呪いを口にする。

反対側で、乳房を押し付けてくる女。

そして絶え間ない手コキと玉揉み。

「あああああああああああ！ やっぱりかよおおおおおおおおお！」

クニクニクニクニ、巧みな手コキに、モミモミモミ、と乳房でも揉み上げるような玉揉み上げ。

「ほらほらほらあ、オッパイよー、むにむに、柔らかいでしょ？ 舐めてもいいのよ？ 行くのが早

まって、男でいられる時間が短くなっちゃうけどね？」

「やだああああ！ 男でいたいよおおおおおお！」

「きゃはははは！ タ○キン潰れてもすぐ治るって！」

「それでも嫌なんだああああああああ！」

「キ○タマ潰すキ○タマ潰すキ○タマ潰す」

羽交い絞めの女が、耳元で呪いを口にする。

反対側で、乳房を押し付けてくる女。

そして絶え間ない手コキと玉揉み。

極限状態に、男の小振りな一物は張り裂けんばかりに勃起し、人並みより大きめに劣る程度の大きさに成長して見えた。

「ほら、そろそろ金潰しの用意よ！」

「あ、はい」

「エッチ経験あるよね？」

「そ、それはもちろん……」

枕営業禁止のホストクラブだったが、それは建前だった。

禁止だけど好きだからやる、というための禁止でしかない。

しかし白鳥はそんな事は知らず、相手のホストに抱かれて有頂天になっていた。

そのホストが唯一の男で、付き合った時間も結局は短く、毎日のようにセックスしたわけでもない。

だからあまり経験はない。

男の鍛えられた足を掴み、引き上げようとする。

「う……」

重い。

こんな足で蹴り飛ばされたのかと思うと再び乳房が痛くなるほどだ。

何とか引き上げ、両脇に抱える。

そして、見下ろす。

「ひっ、お」

剛毛に覆われた陰囊、さらに下の絶対見たくない辺りまで見える気がした。

ぐら、と気が遠くなる。

モミモミ、と横から陰囊を揉みあげつつ、女が見あげる。

「ほら、タ○キン上がってきたから！ もうすぐ出るよ！ 一気に踏み潰すのよ」

「やめてああああああああ！」

——うええええ、キモイキモイキモイ……

「はい、秒読み！」

陰囊から手を離す。

いやいや、足を伸ばす白鳥。

グニュ、と柔らかい生暖かい、しかも毛に覆われた感触が足の裏に伝わる。

逃げ出したい。

さっさと蹴り潰して終わりにしたい。

しかしかないとダメだという。

——ああ、もういや！ いや！ レイジのタマタマだってちょっとキモかったのに、ほかの男なんてなおさら……

のぼせたホストの男性器でさえ気持ち悪く感じるのだから、そもそも白鳥は男性というものに嫌悪感を持っているのかもしれない。

性交を楽しめるタイプの精神構造をしていないのではないだろうか。

と、男が恐怖に震えながらも気持ちよさを感じているのが分かる、情けない声を挙げる。

「うはあああああん！」

ドブ、と力強く痙攣すると、大量の白濁液を放出する親指のような一物。

「今よ！」

「や、やめてくれ！」

足を振り上げる白鳥。

眉を顰める。

——できない……

それでは困る。

一週間後、本番の試合があるのだ。

官僚で、接待だの調査だのという上手い言い訳で公金を使って店に通いつめ、これだけ使ったのだから付き合ってもいいだろうと言い寄ってきた男。

柔道三段で一八〇センチ以上の巨体を持つ大男、川上との調停試合が。

「白鳥！ やるのよ！ あのクソ官僚に勝つには、キ〇タマ潰すしかないんだから！」

「わ、分かってる！ 分かってるけど！」

「ちょっと！ 何してるの、あなたの練習でしょ？ だから優先的に入れたのに……」

「っていうか、キ〇タマ潰していい状況で嫌がるなんて、ちょっとおかしくない？」

おかしくない、嬉々として睾丸を潰し、それに歓声を上げるドS女子の方が絶対におかしいのだ。

しかし、この場ではそれが圧倒的多数派だった。

僅かなセコンドやレフェリーなどのスタッフ以外、選手も客もみなドS女子ばかりなのだ。

というか、セコンドたちもやれといわれれば平気で玉潰しが出来る程度には、Sっ気のある女ばかりである。

そんな中、わざわざ玉潰しの練習に出てきたのに玉潰しが出来ない白鳥はうなだれる。

——私、根性無しだ……

「オラッ！ 大人しくしな！」

「やめっ！」

今まで手コキしていた女が、今度は睾丸を握り潰しにくる。

白鳥を見限り、金握り潰しに移行したのだった。

バタバタ足をばたつかせる男だが、腰の横でしゃがむ女を蹴飛ばすのは無理だ。

なす術がない。

ムギウウウウウウウウウウウウ、と陰囊に爪を立て、睾丸を手の中に納めて圧縮する。

「去勢、去勢、去勢！」

手を叩く観客たち。

手を叩くものは、膝の上にタブレットを置いている。

それを持ち、部屋の中に仕掛けられたカメラで映された映像を見ている者たちもいた。

映像は大体男の顔か、握り潰されつつある股間、陰囊を捉えている。

多くの女が、それを半々映していた。

潰れ行く睾丸を見つつ、それに苦しみ、屈辱に悶える男の顔をみるのが何よりの愉悦なのだ。

「きゃはは！ みてみて、この顔！ やだあ！ タマタマ潰れちゃうよ！ タマタマ潰れちゃうよ！
男の子じゃなくなっちゃう、いやだよ！ って情けない顔！」

「俺さまのタマタマが！ 女如きに潰されるなんて！」

「泣いちゃう？ 泣いちゃう？ 男の大事なキ〇タマ、女に潰されて泣いちゃう？」

「やめええええええええええ、あつ……ぎゃあああああああああああああああああああ！」

ビク、と仰け反り、目を見開いて絶叫する男。

握っていた女が、手の中の抵抗がなくなり、急にグニュッと柔らかいミンチ状になったのを感じて、思わず大きく息をつく。

「ああ……いいわあ」

「確認します！」

バニー姿のレフェリーがぐったりした男に駆け寄り、股間を遠慮なく確認する。

玉袋を広げ、中身が原型を留めていないのを指で押して確かめる。

泡を吹いて気絶している男がビクリと痙攣する。

それを見て、白鳥がさらに青ざめる。

——うわっ、あ、あれ、気絶してるのに……まだ痛いんだ、タマタマってそこまでの……

震えるが、試合では狙うしかない。

睾丸を狙わないととても勝てるわけがない相手なのだ。

いや、狙っても勝てないのではないかとさえ、白鳥には思っていた。

女が絶対勝てるカードしか組まないという話を信じて戦うしかない。

「睾丸二個とも潰れてます！ 完全に去勢状態！ 第五ラウンド終了！」

割れんばかりの大歓声が上がる。

体験版終わり

練習のために出た試合はこれで終わり、

次から白鳥の本番の試合が始まります。

白鳥の対戦相手を待つのは、

金責め敗北M格闘、逆セクハラに短小責め、最後は観客総出の去勢リンチです。

続きは製品版でお楽しみください